

少年犯罪に関する一考察

高畑 朋和 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 中藪 伸二

キーワード：現代の少年犯罪 事件の要因 学校側の指導

1. 緒言

現在の日本での少年犯罪は減少傾向にある。しかし、殺人などの凶悪な犯罪が起こっていることは事実である。そこで、殺人などの凶悪な少年犯罪の背景要因を分析する。その中で、近年インターネットの普及や残虐な表現がされた漫画やゲームなどの影響も検討する。

現代の少年犯罪に焦点を当て、事件の背景要因として、人間関係、環境などを調査し、課題や対策を考察し、今後、学校で生徒を指導する場面で活かそうと考え本研究を行う。

2. 研究方法

文献およびインターネットを参考に研究を進める。1995年以降の少年犯罪事件とそれらの取り巻く背景要因を詳しく調べ、少年犯罪に対する課題、対策を考察する。

3. 結果と考察

近年の少年犯罪を調査した結果、以下のような背景要因が考えられる。

- ・学校に関する要因として、いじめ、人間性・道徳教育の欠如、教諭との信頼関係の欠如が挙げられる。
- ・家庭に関する要因として、両親の離婚・再婚、厳しいしつけ・虐待、過保護・過干渉、親子間の対話・コミュニケーション不足が挙げられる。
- ・文化に関わる要因として、インターネットやテレビゲームからの過激な表現、空想世界と現実との混同が挙げられる。
- ・その他の要因として、周りの期待からくるストレス・葛藤、発達障害などが挙げられる。

少年犯罪を調査した結果、上で挙げた4つの背景要因のうち、いくつかの要因が重なると少年犯罪は起こりやすくなると考えられる。実際に「殺意」を芽生えさせる要因として多かったのは、学校や家庭でのトラブルである。ここで

文化に関する要因であるインターネットやテレビゲームなどの過激な表現は、この「殺意」を芽生えさせ、人を殺す・傷つける直接的要因にはならないと考える。過激な表現は人を殺す・傷つける「手段」として模倣し、少年犯罪に拍車をかけていると考える。その他の要因として少なくなかったのは、発達障害の子どもによる犯罪である。ここで確認しておくことは、発達障害だからといって「少年犯罪を起こしやすい」ことには直結しないということである。

4. まとめ

本研究から学校側ができることを考察してみた。いじめに対して学校側は、担任の教員だけで対策するのではなく、複数の教員でいじめと向かい合う必要があると考えられる。また、いじめをした子どもを厳しく指導することはもちろん、その後のフォローも教員が行う。発達障害の子どもに対しては、保護者との連携が重要である。保護者と発達障害の特徴などを話し合い、学校に溶け込める環境づくりをする必要がある。いじめにも同じことが言えるが「周りに興味を持ち、お互いを尊重する心」を育む授業を展開し、最終的にはクラス全体を仲のよいクラスにできるような指導が重要であろう。

本研究では、少年犯罪の背景要因を参考文献で調査し、課題や対策を考察したが、実際の教育現場に踏み込むことにより、更に違った観点から、少年犯罪につながる要因や対策を見つけ出すことが出来たのではないかと考える。

<参考文献>

草薙厚子 (2010) 大人たちはなぜ、子どもの殺意に気づかなかったのか? . イースト・プレス.
嶋崎政男 (2006) 少年殺人事件 その原因と今後の対応 防止のために親や教師ができること . 学事出版.